心ふれあう おかやまのちょっといい話 シリーズ⑦

※チラシは偶数月の第一月曜日に皆様におとどけしています。

一筋の涙の意味

我が家の嫁姑問題は大声でケンカするほど賑やかでした。私が専業主婦で、四六時中一緒に居るせいかもしれません。

結婚して約3年くらい経った頃でしたでしょうか…。偶然、お義母さんの日記を発見し、読んでしまいました。**お義母さんは私がすることなすこと、すべてが気に入らないらしく、私の悪口が毎日たくさん書いてあったのです。**

悔しくて悔しくて、涙が出そうになりました。でも、泣いたら負けだとこらえました。

同時にこんなことを思われながら私はこの家で暮らしていくのかと。日記を盗み見たこともそうですが、そこに書いてあることを夫に知られるのも辛く、誰にも相談せず、忘れようと努めました。

いい時期も悪い時期も重ねながら過ごした25年、ある日からお義母さんの認知症が始まりました。怒鳴ってみたり、近所を徘徊したり。症状には波があり、ちゃんと話ができることもあります。

しかし進行は止められず、私も家族も疲れ果てていました。どこまでこの人は私を苦しめるのかと、そんなことばかり考えてしまいます。

どんどん勝手に物を捨てるような行動も出てきたので、夫と相談の上、捨てられる前にお義母さんの持ち物を整理することにしました。

整理を進めるうちに、その中から日記帳が大量に出てきました。**あの記憶が蘇りました。**

相変わらず、悪口でも書いているのかと、思いながら開きました。

一番新しい日記は、3ヶ月前。もう、最近ではちゃんと話ができる方が少ないのに、と夫と顔を見合わせました。

お義母さんは病気を感じ、自分なりに必死に闘っていました。記憶が曖昧なこと、体の不調、家族の事を考えると胸がつぶれそうになっていること。特に私に迷惑をかけるだろうことを申し訳なく思っていると書いていました。どんどん、日記をさかのぼると昔、私に意地悪をしていた時の後悔も書いてありました。

目頭が熱くなるのを感じました。私たち家族は、お義母さんを、今まで一体どれくらい理解しようとしたでしょうか。読み進めるほどに、夫と二人で涙が止まらなくなりました。

私は、そばにいたお義母さんを泣きながらを抱きしめました。**「ごめん、ごめんね…」それしか言葉は出てきません。するとお義母さんの目から一筋の涙がこぼれました。**

25年間こらえていた涙がとめどなく流れ続けました。**人生で、専業主婦の私が一番長く時間を過ごしたのは、夫でも子供でもなく、お義母さんでした。**

お義母さんは今、入退院を繰り返しています。どれくらいの時間、どれだけの事が出来るのかもわかりません。でもこれからも精一杯一緒に歩いていこうと心に決めています。

あなたの町のアーバンホール

行く河の流れは絶えずして、
しかも、もとの水にあらず。　鴨長明

「方丈記」冒頭の一節。諸行無常を表した古典として有名です。
何一つとして、とどまっているものなどなく、移ろうこの世の中で、環境を受け入れ、共に生きることの大切さも忘れないようにしたいものです。

葬儀・法要・ギフト　アーバンホール

皆様の『心ふれあう おかやまのちょっといい話』をお寄せください。

ご応募いただいた優秀な作品はアーバンホールのホームページ上・チラシなどにてご紹介させていただきます。ご意見・ご感想もお待ちしています。またご応募いただいた方全員にささやかながら粗品を進呈させていただきます。
◆応募先／アーバンホール『ちょっといい話』係　〒710-0841 倉敷市堀南805-1◆記入事項／①住所②氏名③電話番号④年齢⑤エピソードご応募の方は1200文字程度（原稿用紙・ワープロいずれも可）にてお願い致します。尚、作品の返却はありません。